た。

若き六十年の思い出

秋田県　小畑忠治

私は、大正八（一九一九）年九月十七日生まれの満八十二歳です。軍隊に入営する前の昭和十（一九三五）年から十四年までは青年学校や青年団活動にも積極的に参加しました。当時は、支那事変（日中戦争）も中期にかかり、戦没者なども多く出つつあり、農村においても満蒙へ開拓のための話がだんだんと高まっている頃でありましたから、我々も、安穏として、この青少年時代を過ごしてはならないと、心に感じておりました。

したがって軍隊に入隊する前の、昭和十年から十四年までは青年学校や青年団活動にも積極的に参加しました。

昭和十三年には、二井田青年団の代表として、小畑勇君と二人、秋田県の護国神社建設地の地均しの奉仕作業に、土崎の小学校に一週間程泊まりがけで参加致しました。私達も勇君と戦地に行き、もしも戦死するとここに建設される神社に祀られるのだと話し合ったものでした。その勇君は昭和十六年に入隊し、南方にて戦死され、今は護国神社に祀られております。

私は昭和十四年徴集で、昭和十五年二月、現役の騎兵として盛岡の騎兵連隊に入隊しました。

当時は支那事変の最中であり、村から従軍しておる兵隊の中でも、何人かの戦死者が出ておる時でありますので、私達も戦地の支那へ行くのだろうと覚悟して入隊したものでした。

家を出る時は、家族、友人、部落の多くの人々の「万歳！　万歳！」の歓呼の声に見送られて、四キロ程の砂利道を扇田駅まで歩いて行き、騎兵隊に入隊しました。騎兵隊の本隊は満州に行っておるということで、ここは留守隊だけで、私達が

入隊するのを待っておったのです。
盛岡では、身体検査をし、新しいラシャの軍服を着せられたので、これで一人前の軍人になったことを自覚しました。私達は満州へ行くのだろうと話がありましたが、命令一つで行動しなければならない私達には、その後の行動については全く知らされていませんでした。
入隊二日後の夜、貨物列車に乗せられ盛岡駅を出発し、到着したのは宇品港でありました。すぐに船に乗り、宇品を出帆し、朝鮮の羅新に上陸したのです。
そこで、私達初年兵は二つに別れ、同級生の本多小三郎君とは別れ別れになりました。本多君は騎兵第二十三連隊に入隊で、満州の北の方（国境）に行くとのことでした。私達は鮮満国境を通過し、錦県の錦州に到着したのです。兵舎には、二年兵と三年兵が私達初年兵を待っておりました。
先輩の二年兵と三年兵は騎兵第二十三連隊と弘前騎兵隊から転属して来た先輩の現役兵であり、非常に気合の入った兵隊達でした。錦州にて新しい軍旗を拝受し、騎兵第七十二連隊が編成されました。私達初年兵は一カ月程教育を受け、錦州を後にして北西に移動することになりました。着いた所は開封でした。
開封の兵舎の回りには高圧線が張られており、これが戦地の兵舎なのかと思いました。開封に到着し一週間程過ぎた夜でした。「敵襲！　敵襲！」の声で目を覚まし、班長の命令により兵舎の外へ出たとたん、敵の銃弾が雨霰の如く飛んで来るのです。初めて聞く弾の音に、足に落ちる弾はブチ、ブチとさ程気持ち悪いとは思いませんでしたが、頭の上を飛んで行くピュン、ピュンの音は身も竦み腰が抜ける思いをしたものです。幸いにも、その時は、一人の負傷者もなく終わりました。
その後、部隊は開封より駐蒙軍の旅団騎兵のいる帰徳に移動しました。帰徳には数十台の六輪自

動車（初めて六輪トラックを見た）を持つ自動車部隊がおり、私達の部隊はそれに乗って、何十キロと遠い所まで討伐や、戦闘をし、駐蒙軍の数えきれない程多い作戦、討伐に参加したのでした。

昭和十五年八月、支那事変従軍徽章を受領しております。

初年兵の時、忘れられないのは、部隊兵舎から二台に分乗し討伐に出た時、途中車がぬかるみに落ち、私達は下車して車の後押しをしたとたん、戦友の三年兵は地雷を踏んだのでしょう、ドンと音がして、十メートル程も飛ばされ戦死されました。その人は満期除隊の日を喜んで待っておったので、本当に残念でした。戦地では「今日あって明日は無い」と本当に感じました。

私は北支事変に勤務中、大きな作戦に二度参加しました。

第一回は昭和十六年二月十四日付の朝日新聞記事の写真参照（「旅団作戦、軍旗護衛中隊」中村隊長の右後に私が写されている）。

同日付の朝日新聞には「中村隊に凱歌、新黄河河畔に郷土健児の奮闘」の見出しがあり。その写真説明に次の如く書かれていた。

安徽（アンキ）省北部にて　安保特派員発

「一月二十五日未明、河南省北部〇〇を南下した我が佐久間部隊は、その後、安徽・河南省と新黄河河畔の敵何柱国軍四万を蹴散らして華々しい戦果を獲得しつつあるが、中でも〇〇を護る中村隊は、その精鋭ぶりに物をいわせ、連日激戦また激戦、東北健児の名を輝かせている。

写真は戦闘の余暇、新黄河河畔で、二月二日戦闘後に中村隊長を囲んで撮影した勇士たちである」

その中に、本体験聞き取り者小畑忠治氏（北秋田郡仁井田村）、中村義正隊長（山形県南村山郡柏倉門傳村）等が説明記事中にある。

この新聞記事は初年兵昭和十六年二月、新聞記事は父から戦地に居る私に送られてきたもので「お前の名前はあるが、写真では見出すことができない」と書かれてありました。これは私の初陣の時で、記念すべき写真記事でありました。

しかし、その後、大東亜戦争中期以後には、このような機会を家に知らせることはできなかったから、私にとっては記念すべき、また、幸せな事でありました。

第二回目は、佐久間旅団長の直接の護衛兵としてですから、閣下の側を離れることなく、旅団の旗を持ち歩いたものです。

その旅団作戦には戦車隊、重機関銃隊、砲兵隊、工兵隊等参加しますが、昭和十七年の二月だと思います。我が部隊が川を渡るため、工兵隊が、冬の寒い中、川に入り橋の架設しているのを見て頭が下がる思いをしたことは、今だに忘れることができず。その姿が眼に浮かびます。

二年兵の時は、秋田出身の東文太郎少尉のもと、夏邑警備に服務し、小唄勝太郎一行の慰問を受けました。

私は、昭和十五年四月から、昭和十八年一月までの三十四カ月間、北支の戦地におりましたが、同年兵で近くの鷹巣町出身の河田君と工藤君が戦死されたことは残念でなりませんでした。二人は仲の良い友人であり、戦死の前日まで、色々故郷のことなど語り合ったのに、今でも忘れることはありません。

数年前に、二人の五十回忌が過ぎましたが、その時はご焼香をしてご冥福をお祈りして来ました。

私は三年兵の昭和十八年一月、歩兵第七十二連隊は北支より満州に移動することになり、私達六人は先発隊として前進する途中、昌図の部隊の中に偶然にも、村出身の平沢君と小畑君がいたのです。久しぶりに村の先輩と語り合うことができま

した。

二人は再度の召集で昌図に居るとのことでした。

その後、第七十二連隊は勃利に移動し、騎兵第七十二連隊は約三年で解散し、南方行きの新しい部隊が編成されたのです。私共三年兵は編成から除かれ内地行きの命令が出ました。静岡の第三連隊にて「三年間御苦労様」と言われて、満期除隊したのが、昭和十八年二月です。

三年ぶりにて我が家に帰りましたが、私のことを、ことのほか可愛がってくれていた祖母は、三カ月前に亡くなりました。小学校は二年程前に火災で焼け新しい学校となり、三年間の変わり方を痛切に感じました。日増しに戦争も激しくなり、村からの召集兵も多くなりましたが、私には再召集がなく終わりました。

私は、十八年四月から終戦まで、青年学校の指導員を務めました。終戦後は、元第七十二連隊の戦友会が各県持ち回り当番で、二十九回実施されております。

また、毎年行われる戦没者の慰霊祭には必ず出席して、亡き戦友のご冥福をお祈りしております。

平成十二（二〇〇〇）年三月六日から四泊五日にて中国の上海、杭州、寧波の旅（戦没者慰霊のお寺行事）をして来ました。

戦争当時の中国は今は平和となり、町や村の城壁は取り壊され、農地は国営にて区画整理され、急ピッチに発展しておる姿を見て、戦争の無い平和の有り難さを痛切に感じてまいりました。

激闘　芷江作戦

京都府　山内　勲

私は、京都府船井郡瑞穂町字妙宗寺に、大正十（一九二一）年三月三十一日に生まれた。両親とも健在で土木建設の請負業をやっていた。長男な